

戦時中の成田の様子

佐藤 弘子さん（昭和 15 年生まれ）

当時は、東京や千葉などの大都市だけでなく、成田のまちが空襲されることもありました。東京や千葉などを襲った米軍の爆撃機 B29 が、銚子沖を抜けて帰っていく途中、成田上空で残った爆弾を落として行ったのです。

B29 が近づくと、空襲警報のサイレンがけたたましく鳴りました。すると、私たちは急いで防空頭巾をかぶり、防空壕に逃げ込みました。防空壕とは、空襲の時に逃げ込むために地面を掘って作った穴のこと。穴の中は、「むしろ」というわらを編んで作った敷物を土の上に直接敷いただけで、とてもじめじめしていました。私たちは、防空頭巾をかぶったまま、B29 が去って空襲警報が解除されるのをそこでじっと待つしかありませんでした。このため私は、毎朝「今日は空襲がありませんように」と祈っていたのです。

戦争中、一番困ったのは、食べ物。特に米がないことでした。周りに田んぼはあっても、米を作る大人の男性が、戦争に行ってしまったのです。残された女性と子どもで細々と米を作っていましたが、やっと出来上がっても、兵隊さんの食べ物にするため、国へ供出しなければなりませんでした。

代わりに、1 週間に 1 回ぐらいの頻度で食べ物の配給がありました。配給とは、数に限りのある物を、みんなに行き渡るように割り当てて配る制度のこと。しかし、配給でもらえるのは小麦粉やコーリャン（イネ科の穀物）、トウモロコシ・サツマイモの粉などで、ここでも米は手に入りませんでした。そこで私たちは、少ない食べ物を兄弟や家族、近所の人たちと分け合い、助け合うことで何とか暮らしていました。

次に困ったのは、洋服など、着る物がなかったことです。お店もなければ布地もなかったので、当時の母親たちは、家族のために自分の着物をほどいて、もんぺや上着を作ってくれました。着替えがないので、2～3 日同じ服を着るのは当たり前。私は 4 人姉妹の一番下だったので、いつも姉のお下がりを着ていました。お下がりの服は、あちこち破れたり裂けたりしていて、母がそれらを繕ってくれていました。継ぎはぎだらけの服を着ていても、恥ずかしいとも嫌だとも思わなかったのは、私だけでなく、周りの友達も同じように継ぎはぎだらけの服を着ていて、それが普通だったから。いつかお下がりではなく、新品の洋服を着てみたいと思っていましたが、わがままだと、ずっと我慢していました。

戦争が終わっても、すぐに世の中が平和になったわけではありません。食糧不足はむしろ、戦後の方がひどかったです。日本中の人たちが栄養失調状態だったので、伝染病が流行ると、みんなばたばたと死んでいきました。空腹のあまり、泥棒やすりをする人たちもいて、日本中の治安が悪くなってしまったのです。

これではだめだ、日本を良くしなくては、と多くの人が努力した結果、現在の平和な日本があるのです。戦争は、人の命はもちろん、全ての物を奪ってしまうので、絶対にやってはいけません。